

特集

財政学研究会 2010年冬季シンポジウム コメント3 「政治主導と公共政策をめぐる一政権交代後の幾つかの政策動向に触れて」

寺 西 俊 一（一橋大学）

このシンポジウムで私にどういうコメントが期待されているのか、実はあまりよく分かっていませんが、以下では、私がとくに気になっていることについて、お話をさせていただきたいと思います。

先ほどの飯尾先生のお話で、民主党政権への政権交代が行われたにもかかわらず、旧自民政権時代の政治手法の転換がうまく行われていない実態、あるいは、政権交代で内閣による政治主導の可能性が開かれたにもかかわらず、なかなかそうになっていない実態がよく分かりました。まさに、そのとおりだと感心しながらお聞きしていました。大変貴重なお話をいただいたと思います。

以下、私からの幾つかのコメントとしては、今日のシンポジウムのテーマに関連して、この点から見たらどういうことになるだろうかということで、私がとくに気になっている点に触れたいと思います。

私のレジュメでは、環境政策、農業政策、それから、ある種の外交政策、たとえば沖縄の普天間基地問題に連動した安全保障の問題とか、この間に起こった尖閣列島をめぐる問題、あるいは北朝鮮による挑発的軍事行動への対応をめぐる問題などを挙げています。内政面では、社会保障や福祉政策など、いろいろあると思うのですが、民主党政権に転換して以降、重要な政策分野として、以上のような三つの政策分野が非常に気になるわけです。

このうち環境政策に関しては、いま一方井先生が言及されましたし、それから、農業政策については、今日は関係者があまりおられないような気がしますから、時間の制約もありますので、ここでは、とくに3番目について言及したいと思います。つまり、民主党政権になってからの普天間基地問題への対応、日米安保やアジア外交政策に関わる問題への対応です。この点から見えてきているものは何かということについて、少しこだわった発言をさせていただきたいと思います。

さて、今日のテーマは、政治主導のあり方、あるいは政治構造のあり方ですが、これが変わらなければならないようになっていなかで、日本の政治史上でみれば、エポックメイキングと言ってもいい政権交代が曲がりなりに起こりました。その1年前のアメリカでは、オバマが「We can change!」というスローガンを掲げ、民主党の第1候補になり、そして、共和党に圧勝して、アメリカの大統領に就任し、新たな変化への大きな可能性を開きました。

その影響があったと思いますけれども、日本でも鳩山が同じ役割を担って重要な政治的チェンジが起こりました。私は、この意味は非常に大きいと考えています。とくに日本の有権者が

この政治的チェンジにいったい何を期待して、政権交代を実現させたかということを改めて考えてみる必要があるのではないかと思います。

まず、日本の有権者が変えたいと思った、あるいは、もういい加減に変わってほしいと思ったのは、政治手法の転換ということもあったでしょう。自民政権時代の旧い政治のやり方を早くやめてほしいという政治手法の転換。これも、有権者が求めていたことだと思います。この点については、さきほどの飯尾先生のお話で、にもかかわらず、なぜ変わらないかが、よく分かりました。また、いま時代が求めている政治手法の転換はどうしたらできるかというポイントも、具体例を含めて、非常に分かりやすくお話しいただきました。

しかし私は、もう一つ、日本の有権者は単に政治手法を変えてほしいということだけではなくて、同時に、政治の中身や政治の方向も変えてほしいということを求めたと思いますね。

たとえば環境政策ですが、これは、必ずしも政権交代のときの総選挙における一番の争点ではなかったですから、有権者が本当に温暖化対策で2025年に95年比マイナス25%削減を目標にすべきだという意思を投票で示したのかどうか、これは、私には分かりません。けれども、基本的な方向で言えば、有権者の多くは、多少の負担を我慢してでも、日本はもっと環境政策を前へ進めるべきではないかという意思をもっていると思われます。また、例えば日米安保の問題とか日本の安全保障の問題で言えば、「憲法9条」の問題も含めて、やっぱり大多数の有権者は、基本的には戦争をしたり戦争に加担するような国家にはなあってほしくないと思っています。さらにいえば、多くの有権者が民主党への政権交代に賭けたと思いのなかには、政治の中身や方向として、平和、環境、あるいは福祉、文化といった志向性が示されていると思います。

こうした点でいえば、私は、とくに最も明確な意思表示をした有権者たちは誰かということに改めて着目する必要があると思います。それは、沖縄県民だといえます。私は、沖縄の有権者たちが鳩山新政権の誕生に賭けた1票の重みは非常に大きかったと思います。これは、本土のわれわれがもうそろそろ自民政権に嫌気がさしてきたからちょっと変わってほしいという程度の1票とは質が違う。まさに明確な沖縄県民の熱い願いと期待を背景にした、ものすごく大きな思いがこもった1票だったわけです。もちろん、政権交代を実現させた日本全体の票数の中では沖縄の票数は少ないのですが、その中身として言えば、沖縄の有権者たちの意思表示は日本の国民全体が求めている最も鋭敏な最先端の時代的課題を示し、それを政治的チェンジとして強く求めていたのではないかと、いうことです。

ところが、その沖縄の有権者たちが託した思いが、この間に大きな失望に変わりました。レジュメでは「失望」と書きましたけれども、環境政策などは「失望」ぐらいの表現でもいいのですけれども、沖縄の有権者の思いの場合は、むしろ「絶望」ですね。完全に裏切られたという思いでしょう。とくに、あの鳩山前首相に対してです。さらには、鳩山に対してだけではなくて、あのときの総選挙の前までは沖縄に何度も訪問していた菅直人や岡田克也などの民主党幹部に対しても、とりわけ普天間基地の問題や沖縄の基地負担を何とかしてほしいという願いや思いに対する裏切りの対応について、まさに絶望的な憤りを抱いています。

もともと、いわゆる普天間問題というのは、世界的にみても最も危険な普天間基地の「返還」問題だったんですね。それが、いつの間にか普天間基地の「移設」問題にすり替えられてしまった。さらには、それが沖縄県内での「たらい回し」という方向に政治的に歪曲化されてきた。沖縄県民はそういう誤魔化しと「県内でのたらい回し」に対し断固として拒否するという意思表示を行っているわけです。

こうした沖縄県民に対して、野党時代の民主党幹部はそういう「県内でのたらい回し」には反対する、自分たちが政権を取ったら、それまでの自民政権とは違う方向での新たな解決方向をめざすと言ってきた。そういう政治的公約で鳩山が出てきたわけです。おそらく鳩山は本気だったと思います。「基地なき日米安保」というのが、彼がかつて唱えていたことです。彼はアメリカでのオバマ政権との関係の中で、ひょっとしたら自分の理想が実現できるかもしれないと考えていたと思います。ところが、彼が本気にそう考えれば考えるほど、実は、民主党の内部で足を引っ張った人たちがいるのです。私の見る限りでは、これは単に自民党が足を引っ張ったとか、あるいは官僚が足を引っ張ったというだけではなくて、民主党の内部にも足を引っ張る人がいたと思います。民主党はいったい、そもそも政党の体をなしているのかどうかというのが、私の基本的な疑問でもあります。たとえば、前原氏が、その後、菅政権に交代してから外務大臣になりましたね。前原氏と鳩山氏では、同じ民主党でも安保や外交政策ではまったく考え方が違うわけです。

いずれにしろ、鳩山は、首相の座から引きずり下ろされざるを得なくなった。彼はおそらく、挫折の中で6月2日に退陣表明をしなければいけなくなったと思いますが、それは、普天間問題での挫折が一つの大きな要因です。

これに代わって登場してきた民主党政権の第二期目の菅首相は、鳩山政権の副総理であり、また国家戦略担当大臣でもありながら、普天間問題には一度も触れようとしませんでした。そして、政権の座に就くや、すぐに鳩山が挫折して受け入れを余儀なくされた日米合意に沿って、「私はやります」と宣言しました。日米安保政策で言えば、旧自民政権以上に、対米追従的になっています。

とくに普天間の問題に関して言えば、沖縄県民が求めたチェンジの方向ではなく、むしろ、まったく逆戻りしてしまっているわけです。とらわけこの問題では、いまの民主党政権による政治主導がめざす方向とその内実が最も端的な形で示されているのではないかと思います。

さらにいえば、この普天間問題は、単に沖縄の基地負担の問題、あるいは安全保障の問題に限定された問題ではなく、これは、環境政策のあり方をめぐる重大な問題でもあるんですね。しかし、日本のほとんどのマスコミでは、この問題を環境問題として取り上げていません。

普天間基地の移設先とされている名護市の大浦湾の沖合あたりは、貴重な野生生物であるジュゴンが生息するうえできわめて大事な海域です。名護市へのもともとの移設案では、陸地のほうのキャンプ・シュワブ案だったのが、現在の案では、大浦湾を埋め立ててV字型の滑走路をつくるというものになっています。しかも、当初は、1,800メートルぐらいの滑走路案だったものが、いつの間にか、その1.5倍もの2,800メートルという拡張案になっています。そして名護

市の沖合にあるジュゴンの貴重な生息地を無謀にも破壊するという案になっているわけですね。

このような無謀な案に対して、ご承知のように、幾つかの団体が「沖縄ジュゴン訴訟」を起し、アメリカのカリフォルニア連邦地裁に訴えてきました。世界の環境保護団体は、軍事的必要性という大義名分のもとで、こんな大事なところを無謀に破壊するようなものをつくるべきではないという抗議の声を挙げています。しかも、今年（2010年）は、「生物多様性条約」の第10回締約国会議が名古屋で開かれたという重要な年です。一方で、生物多様性保全の重要性を確認する国際会議を開きながら、他方で、沖縄では、きわめて大事な野生生物の生息地を破壊してしまうということに、何らの矛盾も感じないような日本政府の一貫性のなさをどう考えるのか。こうした点に、私たちはもっと敏感になる必要があるのではないかと思います。少なくとも沖縄県民はこの点で、ものすごく憤っているわけです。けれども本土とは大きな温度差がありますね。あるいは本土の私たちは、沖縄の問題をあまり自分たち自身の問題として受け止めていない感があります。このあたりの沖縄と本土との間のギャップ、この点も、改めて真剣に考えなければいけないのではないかと思います。

おそらく沖縄県民から見ると、日本の本土政府はいまだに沖縄を日本の国土だと考えていないのではないかと思います。沖縄では、長年にわたる怒りのエネルギーがたまっています。こうした沖縄の現実と思いから、これからの日本の政治の方向やあり方を根本的に考え直さないかぎり、自民政権から民主党政権になろうと、あるいは、そこで多少の政治主導が発揮されようがされまいが、そして、飯尾先生がおっしゃるような方向での、よりスマートな政治手法が実現されようがされまいが、私に言わせれば、まったく意味がないのではないかとと思われるわけです。

以上、私の言いたいことを申し上げます。

そこで、飯尾先生へのご質問です。まず一つは、この間、日本のマスコミのあり方について、私は大きな問題を感じています。たとえば、私も呼びかけ人の一人に加わって、沖縄の普天間問題で「有識者声明」というのを、2回、出しました。ところが、沖縄の新聞は一面トップで取り上げましたが、本土の主要な新聞はまったく1行も報道しなかったのです。記者会見をやって、沖縄と本土でのマスコミの対応にこんなにも明白な違いが出たことは、かつてなかったのではないかと思います。とくに本土の主要なマスコミは、もはやジャーナリズム本来の魂を完全に失っているのではないかと、感じました。

この状況は、この間の政権交代に関するいろんな報道でも同じように現れているように思います。いま、日本の政治のあり方を考えるとき、こうした「ジャーナリズムの劣化」とでもいうべき問題をどう考えるかが非常に重要な問題になっているという気がします。

ご承知のように、コリン・クラウチという人が『ポスト・デモクラシー』という本を書いています。そこでは、ヨーロッパ起源の近代民主主義の政治も、逆U字曲線ではないけれども、その成熟の頂点から、だんだん衰退に向かってデクライン（decline）しており、いまや「ポスト・デモクラシー」の時代に入っているのではないかと述べています。そして、この「ポスト・デモクラシー」の時代における衰退化現象の一つに、ジャーナリズムが本来の批判精神をまっ

たく失ってしまい、まともな報道を、まともにできなくなるという「ジャーナリズムの劣化」があるということを言っています。日本も、そういう時代に入っているような感があります。この点で、この間の日本のジャーナリズムのあり方について、飯尾先生はどんなふうに見ておられるか、ぜひ、お聞きしたいと思います。

第二にご質問したいことは、そうした「ジャーナリズムの劣化」とともに、日本の有権者、とくに本土の有権者の投票行動ないし政治的選択の質的レベルもどんどん劣化しているのではないかとされます。先ほども触れたように、沖縄県民の真剣な1票に比べて日本の本土の有権者は、劣化したマスコミの影響も受けて大きく流れてしまう。「劇場型政治」とか、「観客民主主義」という言葉も使われていますけれども、今日のデモクラシーの政治において、一番重要な役割を担うべき有権者の政治的主体としての成熟度という点からみた場合、この間の日本の国民、あるいは日本の有権者の政治選択のあり方やその質的レベルについて、政治学者はどういうふうに見ておられるのか。この点についても、ぜひ、お聞きしたいということです。

3点目の質問は、民主党という政党そのものの評価についてです。私自身は、いまの民主党は、政治的にはまさに「雑居集団」ではないかと思っています。そこには、「旧い自民党的なもの」として小沢派がありますね。それと並んで、「新しい自民党的なもの」としてたとえば前原派などがありますね。その他、諸々の政治的色合いのグループがまさに雑居しているという印象がぬぐえません。いったい、今の民主党というのは、どういう政党なのか、それは、どういう政治的受け皿なのか、この点についてのご意見を伺いたいと思います。

私自身は、いまの民主党が迷走するのは、ある意味では当たり前ではないかという気がします。だから、そういう意味では、今後も政権交代が何度も行われて、そのプロセスを通じて、政党の組み替えや再編がさらに進んでいかざるをえないということを想定しないと、おそらく日本の国民が真に望んでいるまともな方向への政治の変化を担う政権というのができあがってこないのではないかという気がします。

私自身は、ちょっと厳しいかもしれませんが、いまの民主党に対しては是々非々であって、民主党という政党そのものにはあまり期待していません。あるいは、いまの民主党には、もう1回再編してもらって、もっとまともな政党になってもらいたいと思います。こうした点で、民主党という政党そのものの中身をどう考えたらよいかという問題ですね。

以上、3点ぐらいについて、ぜひとも、飯尾先生のご意見をお聞きしたいと思います。かなり勝手なことを申し上げました。時間も少しオーバーして申し訳ありません。

(寺西先生終了)

司会：

ありがとうございました。